

研究分野のキーワード：幼児，からだ，感性，表現，コミュニケーション

研究紹介



大人はみんな、むかしは子どもだったのに・・・なぜ、今更子どものことを勉強するの？ どうして子どものことを研究しなくちゃならないの？ そう考えてみると、子どもを理解するという研究はちょっと不思議ですよ。私の研究は、そんな不思議な子どもたちを「からだ」という視点から紐解くことです。

ひとつは、子どもたちのからだを元気にするための研究です。

1970年代以降、テレビゲームなどの出現によって、子どもたちの遊びは大きく変化しました。子どもたちの身体の活動量を激減させ、体力や運動能力の低下を招いただけではなく、自分自身の生活のリズムを整えていく力にも影響を及ぼしています。子どもたちが原因をつくったわけではありませんが、それらは子どもたちを蝕み、その結果は未来の社会に現れてきます。そこで私は、子どもたちの身体の活動量を増加させ、活動する意欲を活性化するための要因を「プレイ」「リーダー」「チャレンジ」「ソーシャル」とし、一人ひとりの子どもに対して、どこに問題があって、どんな環境を与えて、どんなことに興味を持たせてあげたらいいのかを調べて考えています。子どもは大人の縮小版ではないのです。子ども独自の調査や方法が必要になります。

もうひとつは「からだところのかかわり」の研究です。「からだ」の研究者じゃなかったの？ そうなのですが、ひとの「からだ」と「ところ」は別々ではありません。嬉しいことがあるとピョンピョンとウサギさんみたいに跳んでしまう、カタツムリを見た日は、カタツムリみたいにゆっくり歩きたくなる・・・子どもたちの感じるところ、表したいと思うところ、だれかに伝えたいと思うところ、そんなところがからだにどのように表れてくるのか、そして、からだで表す経験を豊かにすることによってところも動くことがあるということを、「身体表現」「感性」「模倣」「身体的コミュニケーション」という言葉を使って、それぞれの中身を具体的に捉える研究をしています。まずは、子どもたちの生活する場に出かけていきます。子どもたちと一緒に「鳥になろう！」と遊戯室を飛び回っている日もあります。「わたし、やりたくないもん」と言って立ちすくんでいる女の子の指先がひっそりと鳥の羽根になって動いているのを、今度は一緒にやろうねと、微笑みながら見つめている日もあります。突然起こる子どもたちのケンカに益々の不思議を感じる日もあります。研究？遊んでいるみたい？



幼児教育という世界での研究は、すぐに結果を目にすることができないことがたくさんあります。10年、20年、もしかしたら100年後（私はこの世にいないけど・・・）にしか現れてこないものを追い求めなければならないのです。やっぱり不思議です。